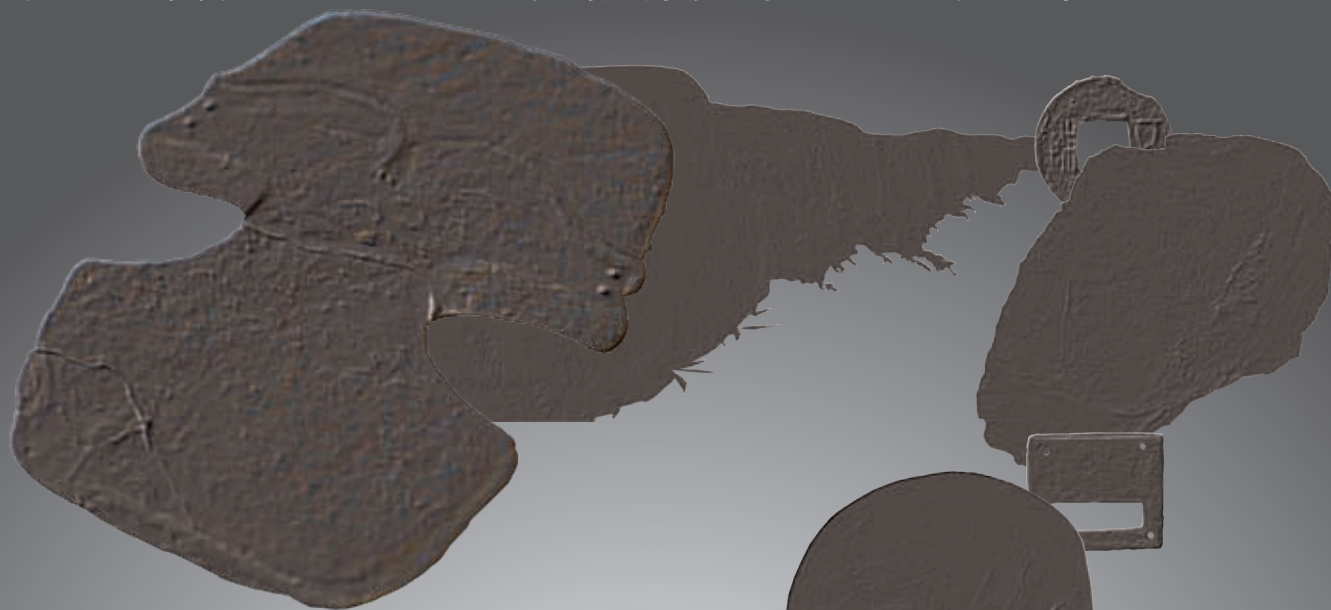


平成 19 年度 山口大学埋蔵文化財資料館 第 24 回企画展図録



やまぐち 古代の七不思議

the Seven of wonders of the ancient YAMAGUCHI

開催場所：国立大学法人山口大学 埋蔵文化財資料館

開催期間：平成 19 年 11 月 3 日 (土) ~平成 20 年 2 月 29 日 (金)

開館時間：午前 9 時 ~午後 5 時

休館日：土・日曜日、祝祭日

※休館日に入館ご希望の方は、事前にご連絡ください
(団体のお客様に限ります)

入館料：無料



やまぐち古代のミステリーツアーへようこそ！

『文字に残されていない大昔の出来事』を知りたい。誰もが抱いている欲求ではないでしょうか。私たちの遠い祖先が日々何を考え、どのような生活をしていたのか…想像が無限に広がりますね。考古学は、このような欲求を満たすことを目的とした学問です。E・モースによる大森貝塚の発掘調査からはや 130 年、日本の近代考古学は現在までに多くの資料を蓄積し、徐々に日本列島の太古の様相を解明しつつあります。しかし、やはり現在でも解釈不能な『謎』はたくさん残されているのです。今回の企画展示では、郷土山口県の古代の謎をテーマとしました。それでは、ミステリーツアーに出発です。

不思議 1 ジーコンボ古墳群

日本海に浮かぶ孤島の遺跡

見島は山口県萩市の北方約 4.6 km の日本海沖に浮かぶ離島です。島の規模は、東西約 2.5 km、南北約 4.6 km、面積は約 7 km² です。見島は火山島であるため山が多く、低地は島の南東部と北東部に限られています。

ここで紹介する「ジーコンボ古墳群」は島の南東の低地部、本州側の磯浜（横浦海岸）に位置する遺跡です。昭和 35 年（1960）から昭和 37 年（1962）にかけて、古墳群の発掘調査をはじめ、地質、生物、民俗、歴史を含めた見島の総合学術調査が行われました。その結果この古墳群は 7 世紀後半から 10 世紀初頭まで継続して築かれた、約 200 基からなる一大墳墓群であることが明らかとなりました。日本海中の孤島に、奈良時代から平安時代にかけて巨大な墳墓群が形成されていたという事実が、当時の考古学会に大きな衝撃を与えたのは言うまでもありません。

「ジーコンボ」とは？

遺跡名になっている「ジーコンボ」という風変わりな名称は、実は遺跡がある土地の呼び名に由来しています。総合学術調査当時、見島住民は爺を「ジーコー」婆を「バーコー」、そして古墳群が所在する場所を「ジーコンボ」と呼んでいました。このことから、「ジーコンボ」とは「ジーコー（爺）の墓」つまり「祖先の墓」を意味する言葉ではないかと考えられています。

意外な被葬者

ジーコンボ古墳群の発掘調査は、極めて意外な成果をもたらしました。各埋葬施設からは、多量の須恵器をはじめ、武具や装身具、銭貨、金属製食器など、当時としては非常に貴重な遺物が出土したのです。中でも特筆すべきは、帯飾りの出土です。古代の官人（役人）は、「服飾令」により位ごとに服装が定められており、腰帯の飾りにも材質や色など細かな規定が存在したのです。つまり帯飾りの出土は、その場所に官人が存在したという事実を示す重要な証拠となるのです。

なぜ見島に官人が？

それでは、なぜ日本海の孤島に官人が葬られているのでしょうか？ 実は、見島の所在する場所こそがその問題を解く鍵となるのです。

あまり知られていないことですが、見島は近現代において国防の拠点となっています。日露戦争時には見張台が置かれ、第二次世界大戦時には監視所が設置されていました。戦後はアメリカ軍のレーダー基地が置かれ、現在においては自衛隊がそれを引き継いでいます。この軍事的利用の背景には、見島が大陸から日本列島への海上ルートの要所に位置していることが挙げられます。

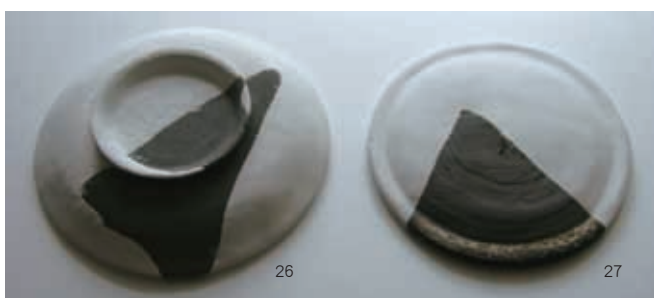
国の防衛という観点からジーコンボ古墳群が形成された時代を考えると、古代史上有名な事件が浮かび上がってきます。天智 2 年（663）、朝鮮半島南西部で起こった唐・新羅連合軍と百済・倭連合軍との戦い「白村江の戦い」です。この戦いに敗れた倭は、列島の辺境防備に力を入れるようになります。西海諸国においては太宰府を主として山城の構築や防人の配備を行います。見島も、これに伴い防衛の一拠点とされた可能性が考えられるのです。

しかし、国防を考える上での疑問も残ります。見島に敵の一軍を殲滅できるほどの軍団が常駐していたのでしょうか？ それとも、近現代と同様「海上の見張り」という役割を担っていたに過ぎないのでしょうか？

後者だとすると、どのようにして情報を本州に伝えたのでしょうか。当時の情報伝達の方法としてまず「烽」が考えられますが、見島と本州とは約 4.6 km も離れており、間には情報を中継できる島はありません。よほど天候に恵まれないと本州から直接煙を見つけることは不可能でしょう。もう一つの可能性として船で伝えるという方法も考えられますが、この方法ではあまりにも時間がかかりすぎるのではないのでしょうか。

謎解きの旅のススメ

このように、ジーコンボ古墳群には未だ重大な謎が残されています。埋葬施設の発掘は現在まで総数の 1 割程度にとどまっており、古墳群の全体像は未だ解明されていません。是非一度現地におもむき、ジーコンボ古墳群の謎を味わって下さい。



- | | | | |
|--------------|------------|--------------|-------|
| 資料 NO.1 | 刀装具（足金物） | 資料 NO.14・15 | ガラス小玉 |
| 資料 NO.2 | 刀装具（鐔） | 資料 NO.16 | 碧玉製管玉 |
| 資料 NO.3 | 刀装具（青金具） | 資料 NO.17~21 | 鉄鏃 |
| 資料 NO.4 | 刀装具（鞘尻） | ●以上 154 号墳出土 | |
| 資料 NO.5・6 | 刀装具（目貫） | 資料 NO.22 | 太刀 莖部 |
| 資料 NO.7~9 | 刀装具 | 資料 NO.23~25 | 短刀 |
| 資料 NO.10 | 耳環（銅製方） | ●以上 151 号墳出土 | |
| 資料 NO.11 | 耳環（銅地金張り） | 資料 NO.26 | 須恵器坏蓋 |
| 資料 NO.12 | 腰帯飾「巡方」裏金具 | ●48 号墳出土 | |
| 資料 NO.13 | 腰帯飾「丸柄」裏金具 | 資料 NO.27 | 須恵器坏蓋 |
| ●以上 151 号墳出土 | | ●64 号墳出土 | |

不思議 2 盃状穴

遺跡から「盃状穴」初出土

昭和52年秋のことです。山口市大内上矢田の神田山の斜面3ヶ所で石棺らしき石材が露出しました。昭和55年に至り、発掘調査が行われることになりました。調査の結果、やはり露出していた石材は箱式石棺と呼ばれる埋葬施設であることが確認されたのですが、その第1号石棺では驚くべき発見がありました。実はこの第1号石棺の蓋石の一枚に、奇妙な穴が多数穿たれていることが発見されたのです。穴は直径約2～3cmの大きさで、蓋石の表面に計21個が確認されました。その後、この蓋石の穴が「盃状穴」であることが国分直一氏（当時：梅光女学院大学教授）によって示されました。神田山石棺は、日本列島における遺跡から出土した盃状穴の初例であるとともに、日本の盃状穴が先史時代にまで遡り存在することを証明した重要な遺跡となりました。

「盃状穴」とは？

「盃状穴」という用語は、前出の国分直一氏により命名されたものです。国分氏は、神田山石棺発見の数年前に、北欧からシベリア、中国、果ては東アジアにまで「盃状の岩の窪み」が広く分布することを知り、それらが先史時代にまで遡るものであることに興味を抱いていました。そこに神田山の知らせです。国分氏は、同年報告された福岡県前原市三雲遺跡の支石墓にも人為的に穿たれたと見られる窪みが存在することを確認し、先史時代、少なくとも弥生時代には日本列島に盃状穴信仰が存在と考えました。また、ヨーロッパや朝鮮半島では、それらの穴が「生＝性」にかかわる信仰、具体的には多産や再生、不滅への願いが表現されたものとして解釈されていることから、日本列島でも同様の信仰物があったと考えました。

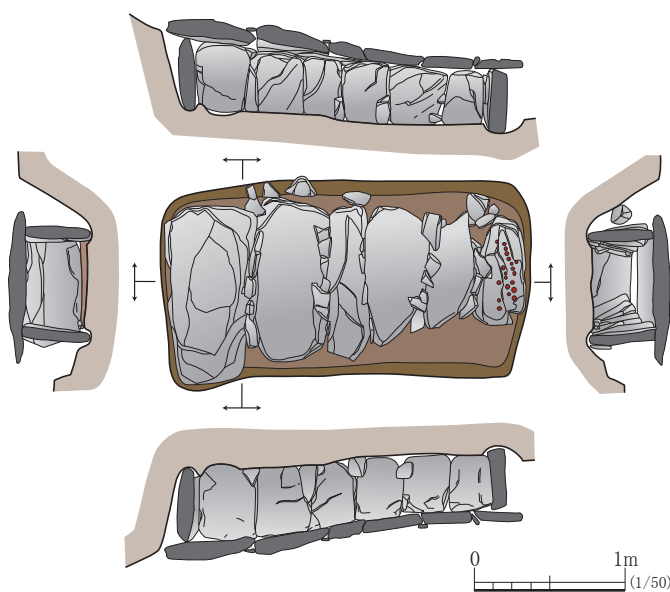
解けない謎

神田山の発見後、各地で次々に盃状穴が確認され始めました。山口盆地だけでも現在20例を超える盃状穴が発見されています。しかし大きな問題点があります。その後発見された盃状穴は、石橋や石垣、石仏、神社仏閣の石造物、さらには歌碑など、先史時代とはかけ離れた時期に造られたものに穿たれているのです。

箱式石棺は、山口県内では弥生時代から古墳時代にかけて築かれ続けました。神田山石棺の発見以降も数多くの箱式石棺が出土しています。しかし盃状穴が発見されたという報告はありません。現状では盃状穴信仰というものが先史時代に一般的な風習であったとは考えられないのです。神田山石棺は、古の信仰を証明すると同時に今も私たちに大きな謎も投げかけています。



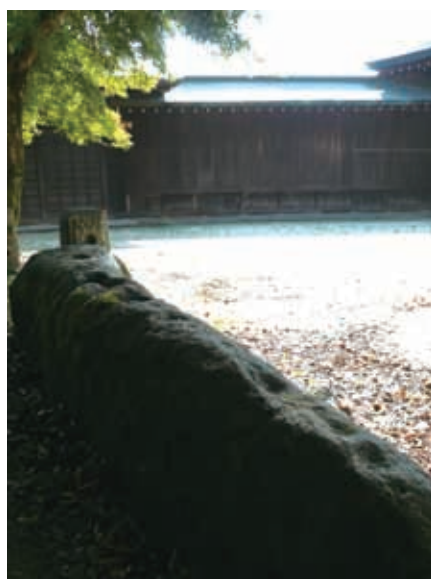
資料 NO.28 神田山第1号石棺蓋石盃状穴
※山口市教育委員会所蔵



神田山第1号箱式石棺墓測量図
※『神田山石棺』1981 山口市教育委員会 より転載・加筆



八坂神社境内の盃状岩
※山口市上壱小路所在



野田神社境内の盃状岩
※山口市上宇野令所在



志多里神社境内歌碑の盃状岩
※山口市大内小野所在

不思議3 土井ヶ浜遺跡

「弥生人骨」の大量出土

土井ヶ浜遺跡は、下関市豊北町神田上に所在する著名な遺跡です。簡単に土井ヶ浜遺跡の歴史を振り返ってみましょう。

昭和の初め以前、現在の土井ヶ浜遺跡周辺は東から西に伸びる砂丘となっていました。この砂丘ではしばしば人骨が顔をのぞかせていたようですが、地元住民はこれらの骨を蒙古襲来(元寇)の折に遭難した元の人々の骨とか、馬や牛の骨と考えていたらしく、あまり話題になりませんでした。昭和6年(1931)に、砂丘上に水車小屋を造ろうとして大きな石を取り除いたところ、多数の人骨が出土しました。発見された頭蓋骨の内2点は京都帝国大学の三宅宋悦氏(当時：医学部助手)に託されました。三宅氏は他の地方の遺跡から出土した骨と比較し、この骨を古墳時代人のものと推定しました。結果的にこの報告は誤りなのですが、土井ヶ浜出土の人骨が先史時代の人類のものとして初めて認識されたのです。

第2次世界大戦後の昭和28年(1953)、土井ヶ浜で最初の発掘調査が行われました。前年に地元中学校教諭が土井ヶ浜で貝製腕輪や人骨を採集し、九州大学の鏡山猛氏(当時：文学部助教授)に通報したことがそのきっかけでした。鏡山氏はこの情報を同大学解剖学教室の金関丈夫氏(当時：医学部教授)に連絡しました。金関氏は、これらの出土品を弥生時代のものと推定し、土井ヶ浜での発掘調査を決断したのです。調査の結果、期待通り土井ヶ浜一帯が弥生時代の埋葬跡であることが確認され、昭和28年(1953)から昭和32年(1957)まで続けられた調査で、なんと207体もの人骨が発見されたのです。昭和37年(1962)には国の史跡に指定され、その後の遺跡保存や遺跡範囲を確認するための調査により、現在までに300体を超える人骨が出土しています。またこの埋葬地が弥生時代前期中頃から中期にかけて使用されたことも判明しました。

土井ヶ浜人骨の謎

土井ヶ浜遺跡で発見された人骨が縄文時代のものと大きく異なることから、土井ヶ浜弥生人の渡来・混血説を唱えたのが前出の金関氏です。

縄文時代の遺跡から出土した頭蓋骨から復元される縄文人の顔の特徴は、顔が短く、横幅が大きく、眉の上が高く隆起しており、鼻も高い。彫りの深い、現代風に表現すると「濃い顔」なのです。一方、土井ヶ浜弥生人の顔は、顔が長く、横幅が狭く、眉の上が隆起しておらず、鼻も低い。つまりのっぺりとした扁平な顔に復元されるのです。これは現在の日本人に多い顔と言えます。また、身長も縄文人の男性の平均値が約158cm、女性が147cmであるのに対し、土井ヶ浜弥生人は男性が163cm、女性が150cmと縄文人より高身長であることも判明しました。

弥生文化は、大陸からもたらされた多様な文化により成立したと考えられることから、金関氏は土井ヶ浜弥生人のような特徴を持つ人骨を、大陸からの渡来人もしくは渡来人の影響を強く受けた人々のものと推測したのです。また、土井ヶ浜遺跡に葬られた人々が皆頭位を東にしており、あたかも海を見ている状態に見えることから、「遠い故郷を懐かしんでいるのではないか」といったロマンチックな推測もなされています。

それでは、土井ヶ浜弥生人は何処からやって来たのでしょうか？ 実は、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム近年の調査により、この土井ヶ浜弥生人と同様の特徴を持つ人骨が、朝鮮半島の海を越えた西側、中国山東省で発見されています。それらの人骨は、弥生時代前期から中期にあたる周代末から前漢時代にかけてのもので、時期的にはピッタリと合致します。

しかしながら、弥生時代初期の遺跡から出土する遺物を見ると、弥生文化の成立には朝鮮半島南部の文化(無文土器文化)が大きく関係しているものと考えられます。つまり、出土するモノからは朝鮮半島南部からの移住者の存在が強く推定されるのです。残念なことに朝鮮半島南部では該当時期の人骨の出土例が極めて少ないため、土井ヶ浜弥生人骨との比較研究が進まない状況なのです。

「土井ヶ浜弥生人の来た道」は未だ大きな謎に包まれています。



土井ヶ浜遺跡周辺地形図



土井ヶ浜遺跡埋葬人骨分布状況

(『土井ヶ浜遺跡と弥生人』2003)

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムより 転載・加筆



資料 NO.29 土井ヶ浜遺跡弥生人骨出土状況模型(土井ヶ浜遺跡の調査成果をふまえて四隅配石墓を復元)

※土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム所蔵

不思議4 沖ノ山出土古銭

砂浜から古銭が!

今から250年程前の元文5年(1740)正月、宇部小串村(現:宇部市小串)の砂浜から多量の古銭が詰められた甕が発見されました。発見の経緯を伝える文書としては『半両銭・五銖銭元文五年掘出覚』が唯一現存しており、「百姓の市左衛門が小串村沖ノ山松浜の砂中から古銭を掘り出し、福原元貞(当時の領主であった萩藩家老)へ献上した」との記述が見られます。

発見場所は「沖ノ山」という地名が示すとおり、過去においては瀬戸内海に浮かぶ島もしくは半島であったものと推測されます。江戸時代以降海岸部の埋め立てが進み、現在では宇部市内の中心街に位置します。

銭貨の遺跡出土例

古銭の発見例は列島全域で確認されていますが、その多くは中近世の遺跡や遺構から出土したものです。中世の遺跡からはしばしば財産の隠匿や保全のためと考えられる備蓄銭が発見され、近世墓からは頻繁に六道銭(死後三途の川を渡るために払う銭)が出土します。一方古代の遺跡を見てみると、律令政府によって銭貨は発行されるものの貨幣経済がうまく発達しなかったため、中近世のように遺跡から銭貨がまとまって出土することは非常に稀な事例となります。出土する地域を見て、大和、摂津、山城、近江など古代の都の所在地とその周辺に偏っています。

ましてや先史時代(古墳時代以前)においては貨幣経済は成立しておらず、当然列島内でも銭貨を鑄造していないため、出土するのは渡来銭に限られており、出土件数、枚数ともに極めて少ないのは言うまでもありません。

沖ノ山の古銭とは

それでは、沖ノ山の出土例を見てみましょう。発見された古銭は「半両銭」(9枚)と「五銖銭」(97枚)と呼ばれる銅銭で、日本では弥生時代の中頃にあたる中国の前漢時代(紀元前206年～紀元後8年)に鑄造されたものです。これらは列島内で出土している古銭の中でも最も古い部類に入るものです。さらに古銭の入っていた甕に目を転じると、弥生土器にはあまり見られない形であることに気づきます。実はこの甕は朝鮮半島の甕の形を模したものであり、弥生時代中期末に位置づけられるものなのです。

以上を整理してみると、中国前漢時代の銭貨が、さほど時間をおかずに山口県に大量に渡ってきており、なおかつ朝鮮半島の土器を模倣した甕の中に入れられていた、というなんと特異な状況が浮かび上がってくるのです。

沖ノ山古銭の謎

弥生時代においては、金属器は大変貴重なものでした。弥生時代中期末には鉄器の生産が行われ始めます。青銅器は実用品というよりは祭器としての役割を担うようになりますが、銅が貴重であったことには変わりません。それではなぜ青銅器の原料となり得る多量の銅銭が地中に埋まっていたのでしょうか。年代の近い類例として、岡山県岡山市の高塚遺跡が挙げられます。この遺跡では貯蔵穴と考えられる弥生時代後期の土坑から新時代の銭貨「貨泉」が24枚出土しており、青銅器の原料として保管されていた可能性が指摘されています。同様に沖ノ山でも古銭が地中に保管され、何らかの理由でその後掘り出されなかったのかもしれませんが、様々な可能性が考えられますが、出土状況に関する情報が限られていることもあり、古銭の存在は現在でも大きな謎となっています。



資料 NO.30・31 銅銭(半両銭) 資料 NO.33～39 銅銭(五銖銭) 資料 NO.40 無文土器系甕形土器(写真右は甕内面に付着した緑青)

資料 NO.41 吉田遺跡出土の弥生土器

※30～40(財) 渡辺翁記念文化協会所有・宇部市教育委員会所蔵 41 国立大学法人山口大学埋蔵文化財資料館所蔵

不思議5 石城山神籠石

遺跡の環境

石城山神籠石は、県域の東南部、田布施町と大和町（現：光市）とを分ける石城山の8合目から山頂付近にあります。標高約360mの石城山は、古代の山陽道推定地と瀬戸内海のほぼ中間に位置します。

霊域説 VS. 城郭説

神籠石については、明治30年代から盛んに論争が展開されてきました。日本古代史で有名な『神籠石論争』です。論争は「神籠石＝霊域」説と「神籠石＝城郭」説の対立がその焦点となりました。

そもそも神籠石という名称は、鎌倉時代後期以前に作られたとされる『高良玉垂宮縁起』が初出とされています。これは、現在の久留米市高良山にある高良山神護石のことで、神護石の名称は、高良山の列石を高良神社の神域の護石と考えたことに由来するようです。同山には延長5年(927年)延喜式神名帳に記載されている式内社高良神社があり、石城山にも式内社である石城神社が存在します。つまり「神籠石＝霊域説」は10世紀前半に存在した古い社を根拠としているのです。

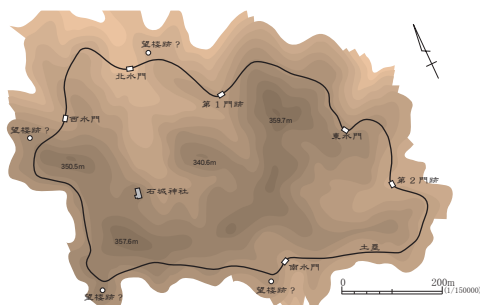
一方、「神籠石＝城郭」説、いわゆる古代山城説は、朝鮮半島の三国時代において築かれていた山城と平面形態が似ていること、列石が土塁を構築するための根石と推定されることなどを根拠としています。しかし神籠石はいずれも遺構の残りが悪く、一見すると当時城であったとは思えないなどの理由により、論争当時はあまり支持されていませんでした。

神護石の謎が解けた？

その後このような状況が大きく転換する契機となったのが、昭和38年(1963)・39年(1964)の石城山発掘調査でした。調査の結果、たたき締めによる版築工法で築かれた土塁とその根固めとして用いられた列石が確認されたのです。また、水門や城門跡なども発見され、朝鮮半島の山城と類似する築造方法であることが確認されました。同年に調査された佐賀県のおつぼ山神籠石や帯限山神籠石でも同様の調査結果であったことから、「神籠石＝古代山城」説が現在有力となっています。

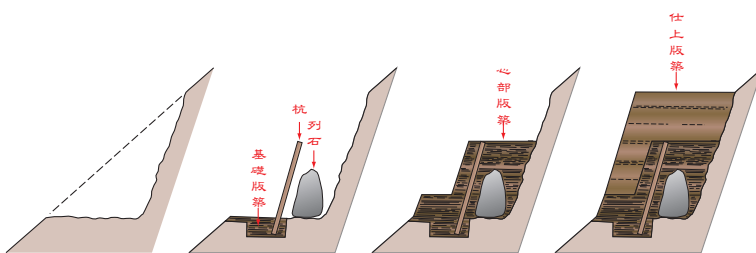
石城山神籠石に残された謎

ところが、石城山の土塁の中から出土した杯や皿などの土器を見ると、底部に系切り痕が見られます。系切り痕は、土器成形の作業台から土器をはずす時に付く痕跡であり、この技法は山陽西部では11世紀以降に導入されたと考えられています。これが事実だとすると、石城山の土塁は11世紀以降に構築されたと考えざるを得ないのです。つまり記紀に記載されている山城の築造年代と土器が示す年代との間に大きな隔たりが生じるのです。これが石城山神籠石の大きな謎なのです。



石城山神籠石 城壘施設図

(『山口県史 資料編 考古2』2004 山口県 より転載加筆)



版築による土塁の工法（推定）

(『石城山神籠石第一次・二次調査概要書』2007 光市 より転載・修正・加筆)



42



43



44



45



46



47



48



49

資料 NO.42・45 土師器台付皿 資料 NO.43・44 土師器杯 資料 NO.46 土師器高台付杯 資料 NO.47 瓦質土器火鉢 資料 NO.48 平瓦
資料 NO.49 昭和38年～39年の調査で採取された土塁の一部

※光市教育委員会所蔵

不思議6 分銅形土製品

「祭祀遺物」は難しい…

考古学において、祭りの道具（祭祀遺物）ほど取り扱いにくい遺物はありません。単純に形の違いによって分類し、時系列順に出現・消滅の時期を明らかにするという研究は比較的容易なのですが、その道具が具体的にどのように使われたのかを解明し、その道具から当時の世界観や信仰といった形に残らない「精神文化」を復元する作業は非常に困難だからです。そうした意味では祭祀遺物の大半はまだまだ謎に包まれていると言って良いでしょう。視点を変えると、用途がよく分からない遺物はとりあえず「祭祀遺物」として認識しておく、という場合も多いのです。

ここでは、数多ある祭祀遺物の中でも、弥生時代の祭祀遺物として代表格とも言える「分銅形土製品」に焦点をあててみましょう。

分銅形土製品って何？

分銅形土製品とは、弥生時代に用いられた土版状の祭祀遺物のことを示します。秤のおもりである「分銅」に形が似ているため、このような名称が用いられています。出土する地域は瀬戸内海沿岸を中心とした西日本に集中していますが、山口県や愛媛県のもは平面形が方形に近く「人の顔」が描かれたものが多い、岡山県や広島県、香川県のもは平面形が円形に近いなどの地方色も見られます。

土偶と何が違うの？

縄文時代の似たような土製祭祀遺物に「土偶」があります。「土偶」と聞くとみなさんは有名な遮光器土偶のような立体的な人形を想像されると思いますが、実は西日本で出土する土偶は大半は「板状土偶」と呼ばれる土版状の土偶です。また、土偶と分銅形土製品はともに「破損した状態で遺跡から出土する」という共通点があります。両者とも欠けている部分が発見される例は極めて稀であることから、意図的に「壊す」という祭祀行為が行われたものと推測できます。これらの共通点からこの板状土偶が弥生時代に至り分銅形土製品に変化した…と考えたいところですが、残念ながら両者には大きな隔たりもあります。

まず、土偶が基本的には女性の性的特徴（乳房や性器）を強調して表現するのに対し、分銅形土製品は人面表現が中心となっており、その性別も不明です。さらにこの人面表現も、出現期のものに見られる「V」字状の文様が変化したとも考えられるため、分銅形土製品が本来「人形」を意識した道具であったという確証はないのです。土偶と分銅形土製品との繋がりはいまだ解明されぬ謎と言えます。

日本最大の分銅形土製品

平成5年(1993)初夏、山口県田布施町（現：周南市）に衝撃が走りました。山口県教育委員会と山口県埋蔵文化財センターが調査を行っていた明地遺跡において、直径約2mの円形土坑（性格不明の穴）の中から、これまでに見たこともないような巨大な分銅形土製品が出土したのです。この分銅形土製品もやはり中央部で折損していましたが、驚くことに折れた2片が近接した位置に並べられていました。全体像を知りうる分銅形土製品の出土ということだけでも極めて珍しい例なのですが、さらにこの土製品は全長21.8cm、重量870gという空前絶後のサイズだったのです。現在でも、「全体像を知りうるものとして」という条件付きですが、日本最大の分銅形土製品としてその地位を誇っており、山口県の有形文化財に指定されています。分銅形土製品の用途・性格についてはいまだ完全には判明していませんが、明地遺跡出土分銅形土製品は、他の分銅形土製品とは多少性格の異なる祭りの道具だったのでしょうか。まさに謎から謎が生じてしまった一品と言えるのです。



資料 NO.50 明地遺跡出土分銅形土製品レプリカ ※(財)山口県埋蔵文化財センター所蔵

資料 NO.51 岡山遺跡 A 地区出土分銅形土製品 ※国立大学法人山口大学埋蔵文化財資料館所蔵

資料 NO.52 天王遺跡 A 地区出土分銅形土製品 ※国立大学法人山口大学埋蔵文化財資料館所蔵

資料 NO.53 天王遺跡 A 地区出土分銅形土製品 ※国立大学法人山口大学埋蔵文化財資料館所蔵

資料 NO.54 吉田遺跡総合図書館調査区出土分銅形土製品 ※国立大学法人山口大学埋蔵文化財資料館所蔵



不思議7 王屋敷（向津具）遺跡出土 有柄細形銅剣

有柄細形銅剣とは？

弥生文化は、大陸から稲作を中心とした様々な文化がもたらされたことにより成立します。青銅器もその文化要素の一つです。日本列島にもたらされた青銅器は「剣」「矛」「戈」などの武器が中心でした。出現期の青銅器は主に朝鮮半島からもたらされたものでしたが、さほど時間をおかずに列島内での生産が始まります。出現期には実用に適して身部が「細形」であったこれらの青銅製武器は、次第に祭器として生産・使用されるようになり、剣・矛・戈ともに身部が幅広になっていきます。考古学では、その形態的な変化から「細形」→「中細形」→「中広形」→「広（平）形」という名称を与えて分類をおこなっています。つまり「細形銅剣」とは、初期形態の銅剣であることを示す言葉なのです。

また、日本列島内で出土する銅剣は、大多数が剣身部と茎部だけを鑄造したものです。柄には木などの有機物が用いられていたと考えられます。ところが、ごく稀に剣身部と柄部とを同時に鑄造した銅剣が出土することがあります。このようなものを「有柄銅剣」と呼ぶのです。現在、日本列島での細形銅剣系有柄銅剣の出土例は僅かに4点（王屋敷遺跡出土品・福岡県前原市三雲南小路遺跡出土品・佐賀県唐津市柏崎石崎遺跡出土品・佐賀県神埼郡吉野ヶ里遺跡出土品）です。これまで発見されている銅剣の総数が約700点、その内細形銅剣が約100点であることから考えると、有柄銅剣がいかに貴重な青銅器であるかが分かります。

王屋敷（向津具）銅剣の発見

この銅剣は、発掘調査によって出土したのではなく、明治期に偶然発見されたものです。発見の経緯については、長らく「明治20年（1887）頃、大津郡向津具材大屋敷（現：長門市油谷町字本郷）において、田地開墾作業の掘削の際、丘陵斜面の崩落土中から発見された」と伝えられていました。ところが、その後『山口県史 資料編考古1』（平成12年発行）編纂にともない出土状況の再調査をおこなったところ、銅剣が発見されたのは明治34年（1901）のことで、暴風雨襲来による地滑りの復旧工事の際に、近くにあった石積み基壇をもつ五輪塔が崩落し、その下位から出土したことが明らかとなりました。同時に銅鏡（昭明鏡か）も出土したと伝えられていますが、実物は確認されていません。

この銅剣の最大の特徴は、やはり剣身・柄・柄頭飾（はとうしょく）を一鑄で作りに上げている「有柄銅剣」である点です。現在は7個に破損しており、鋒（きっさき）と把頭飾上端の円盤部を欠損していますが、全体像が把握できる貴重な資料です。昭和31年（1956）6月28日付けで国の重要文化財に指定されています。

なぜ向津具半島に有柄細形銅剣が？

それでは、このように貴重な銅剣がなぜ山口県、しかも日本海に突出した向津具半島の先端部付近という特殊な地点から出土したのでしょうか？

他の有柄銅剣の出土地を見ると、三雲南小路遺跡は『魏志』倭人伝に記されている伊都（いと）国王の墓地と推定されており、柏崎石崎遺跡は近接する宇木没田遺跡とともにやはり『魏志』倭人伝に記されている末廬（まつろ・まつら）国の王墓もしくはそれに匹敵する有力者の墓域と推定されています。吉野ヶ里遺跡も弥生時代のクニの一つと推定される遺跡であり、有柄銅剣の所有者は王クラスの有力者と推定されます。

周辺にクニ規模の集落遺跡が見あたらない王屋敷遺跡の性格は、未だ謎につつまれています。もしかすると、向津具半島には未知の弥生時代巨大集落が埋もれているのかもしれない。



油谷湾南方より向津具半島を望む



資料 NO.55 王屋敷（向津具）遺跡有柄銅剣レプリカ
※国立大学法人山口大学人文学部考古学研究室所蔵

展示協力 (50音順・敬称略)

(展示協力)

宇部市教育委員会・光市教育委員会・(財)山口県埋蔵文化財センター・(財)渡辺翁記念文化協会・山口市教育委員会
山口大学人文学部考古学研究室・有限会社テアトロ工芸